

P1-056

発達支援センターに通園する家族の医療機関受診に関するニーズ

宮城 由美子¹、横尾 美智代²、田中 美樹³、青野 広子⁴¹福岡大学医学部 看護学科²西九州大学健康栄養学部 健康栄養学科³福岡県立大学看護学部⁴福岡看護大学

【はじめに】

発達障がい児を含む「気になる子ども」の特徴により、病気に罹患して医療機関を受診した際に、受診を断られたり、受診する際の困難さが報告されている。つまり診察時、暴れるなどの行動や指示通りに行動しないことなど、診察、検査を行うに当たり医療機関にとって困難であることが感じられている。そこで、発達支援センターに通園している子どもを持つ家族に医療機関受診に関するニーズについて検討した。

【方法】

本研究の趣旨を説明し研究協力に同意が得られた A 県内の発達支援センターに通園している12家族に（母親11名父親1名）にインタビューを行った。インタビューは2016年1月～3月、半構成的面接にて行った。インタビューでは、近隣診療所やクリニックの受診経験とその際に困ったことやスタッフの対応、受診にあたっての医療機関に対する要望や改善してほしいことなどである。分析はインタビュー内容から逐語録を作成してコード化し、質的に分析しサブカテゴリ、カテゴリを抽出した。本研究は福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果・考察】

データ分析の結果、10のカテゴリ（以下《 》で示す）が抽出された。発達支援センターに通園している家族は《発達障がいと思われる子どもの特徴から生じる困りごと》があることで、《医療機関スタッフの対応に困惑》し、その上で《スタッフの発達障がいに関する知識の不足》のため理解を求めている。一方で発達障がいの特性からくる“待てない行動”に対して《待ち時間の配慮や工夫》や無理な診察をすすめない《医師による配慮》、来院や診察をすることが子どもにとって良い体験になるような《スタッフの配慮》を感じていた。しかし、スタッフへの声かけや何気ない言葉遣いなど《スタッフの態度に関する不満》や他院で経験したことがある予約システムの導入など《医療機関の体制》についてのニーズもみられた。家族は様々な医療機関を受診しており、とくに支援センターで知り合った母親同士の情報を活用し、《医療機関探し》を常に行っていた。そのため母親同士において人気のある医療機関は、患者数も多くさらなる待ち時間もみられており家族は《受診のための準備や工夫》を行っていた。スタッフが障がいに関する理解と対応ができるように検討することが必要である。本研究は平成26-29年度科学研究費助成事業（基盤研究C）26463426の助成を受けた研究の一部である。

P1-057

18トリソミーで医療的ケアが必要な児の母の自己効力感を高める関わり

森脇 伊吹、富田 恵子、中井 美喜子

鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

【目的】

医療ケアが必要な児の母は、はじめは戸惑いを感じている場合が多いといわれている。今回、ケアの習得や児の対応について自信のなかった母に対し自己効力感を高めるケアを行った。このプロセスについて明らかにする。

【研究方法】

事例研究。看護記録から基本情報を収集し、母への看護介入を丁寧に振り返った。

【事例紹介】

18トリソミーと診断。医療的ケアとしてNGチューブからの注入がある。

【倫理的配慮】

研究の目的について述べ研究への参加は自由意志であり、参加を拒否した場合も個人や団体が不利益を受けることがないことを明記し、書面で同意を得た。個人が特定されないよう配慮した。

【結果】

自宅への退院を目標に、ケアの習得を中心に指導した。ケアについて母は問題なくできていたが24時間児と過ごすことで、夜間の注入や児の対応ができないことが課題としてあがった。児は夜間機嫌が悪くなり、啼泣することが多かったが、母は児が泣いていても眠っており気づくことができず、対応することが困難な現状があった。そのような状況が続き、「他のお母さんができている事が自分にはできない」と母は、他の母と比べて自身のことを過少評価していた。そこで、行ったケアを見直すと母に対しケア習得を中心に指導ばかりしていたことが明らかとなり、母の気持ちに寄り添った関わり必要性が明確になった。まず、母へ児の病状について改めて主治医に説明してもらったことで、母は児の病状と泣きすぎるもののリスクを関連付けて理解することができた。また、夜間に児が泣いている時は、母に声をかけ一緒に考えるようにした。「起こしてもらえてよかった。抱っこしてみます。泣き止まなかったら、また相談します」と言われ、母は自分でやってみて難しい場合は人に相談するという方法を見つけ出すことができた。起きられないことに焦点を当てるのではなく、他の人に起こしてもらえれば、母自身でも対応ができていると伝えることで、「最近は自分でも頑張れています。」と母の自己効力感が高まった。

【考察】児の病状を知り、自宅へ退院するためにケア習得を中心の指導を受けてきた母は、できないことでの自己効力感低下を認めていた。しかし、母の言動から、日々の看護を振り返り指導的な関わりではなく母と共に考える看護ができたことは母自身で試行錯誤し、自分に合った対処の方法を見つけ出し、自己効力感を高めることができたといえる。